

今週の為替相場見通し(2024年1月9日)

総括表		先々週と先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		140.27 ~ 145.98	144.61	142.80 ~ 146.50
ユーロ	(ドル)		1.0877 ~ 1.1139	1.0940	1.0850 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		155.10 ~ 158.97	158.31	156.50 ~ 160.50
英ポンド	(ドル)		1.2612 ~ 1.2825	1.2719	1.2400 ~ 1.2900
(1英ポンド=)	(円)	*	176.91 ~ 187.22	183.93	180.00 ~ 186.00
豪ドル	(ドル)		0.6641 ~ 0.6871	0.6714	0.6550 ~ 0.6800
(1豪ドル=)	(円)	*	93.15 ~ 100.30	97.09	95.50 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1)今週の予想レンジ: 142.80 ~ 146.50 円

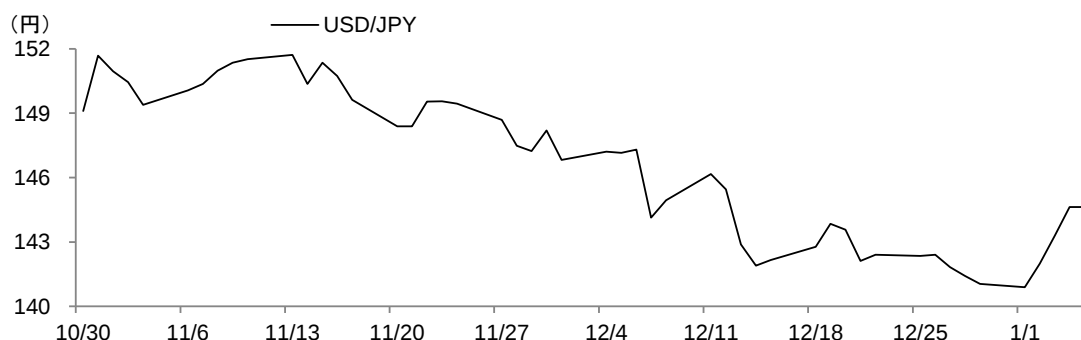
(2)ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

12月25日のドル/円は142.50円でオープン。翌26日までクリスマス休暇で多くの国が休場となる中、142円台前半で小動き。27日は12月会合の日銀主な意見で、早期の政策修正期待が後退し円売りが優勢。142円台後半まで上昇したものの、米国債入札の堅調な結果に米金利が低下するとドル売りが強まり、141円台後半まで反落した。28日は米金利の低下、米経済指標の軟調な結果を受けて、一時140.27円まで下落も、引けにかけて上昇に転じ、141円台前半まで値を戻した。29日は期末のフローをこなしながら141円ちょうどを挟んでの推移が中心となり、141.01円で越週した。年初1月2日は141.12円でオープン。市場参加者は少ないながらも、1日の能登半島地震の影響が日銀の政策修正観測の後退につながってか、円売りが優勢。米金利の上昇を受けたドル買いも後押しとなり、141円台後半まで値を上げ、3日も上昇基調が続く中、Fed高官の発言や米経済指標の好結果を背景に143円台半ばまで上昇。4日も同様の流れの中、144円台後半まで水準を上げると、5日の東京時間には145円台を突破。米国時間に発表された米12月雇用統計の堅調な結果に一時145.98円まで上値を伸ばすも、その後の米12月ISM非製造業景況指数の予想を下回る結果にドル売りが強まり、143円台後半まで急落し、144.61円で越週した。

今週のドル/円は底堅い推移になることを予想する。年初の能登半島地震の影響を受けて、昨年12月会合の結果や日銀主な意見をもってしても、市場の一部で依然として燻っていた1月会合での政策修正期待が完全に剥落してしまった印象。大企業の決算が集中する3月会合での修正に疑問符もつく中、最短でも4月という織り込みがされ始めると、しばらくは円を買うという選択肢が好まれる地合いにはならないだろう。とはいえ長い目で見れば、本年のメインテーマは日米金利差の縮小にある点は事実であり、早期の修正を想起させる材料には敏感に反応する可能性も高いため、関連したヘッドラインには警戒をしておきたいところ。一方米国は引き続き雇用が堅調。米金利も年初から上昇基調にある中で、金利妙味に加え、経済の力強さも示される現状に、引き続きドル選好地合いがドル/円のサポートになりそうだ。金融政策の不透明感から、経済指標の結果に一喜一憂する相場は続くが、方向性を見極める上で特に重要となる、11日(木)に発表が予定されている米12月CPIの結果にはより注目しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先々週と先週(12/25~1/5)の値動き: 安値 140.27 円 高値 145.98 円 終値 144.61 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1) 今週の予想レンジ: 1.0850 ~ 1.1100 156.50 ~ 160.50 円

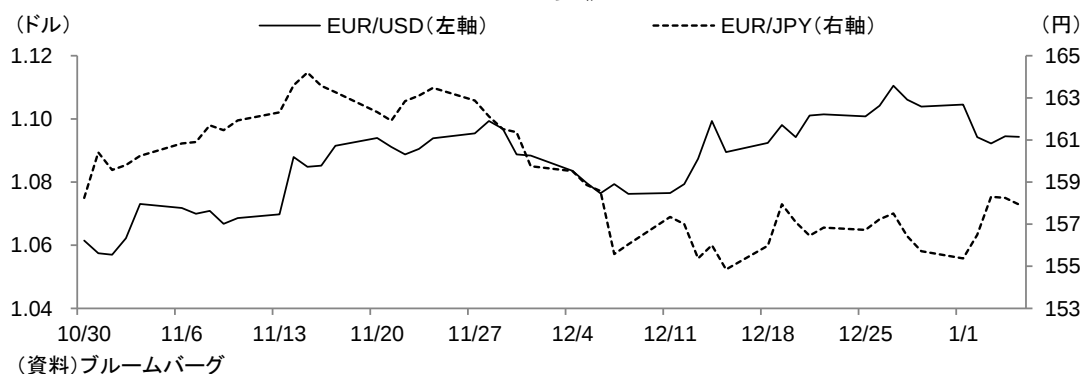
(2) ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

12月25日週のユーロ/ドルは上に往って来いの展開だった。1.1014で25日東京市場をオープン、直後につけた1.0993がこの週の安値に。26日は前日に続き欧州休場で薄商いの中、1.10台の大体に乗せる。米金利の低下を見ながら、1.10台半ばまで緩やかに上昇。27日は欧州株高に連れられたユーロ買いに併せて、米金利続落によるドル売りが重なり、1.1100を上抜け。28日は同水準で横ばい推移だったが、オーストリア中銀総裁から来年の利下げについて「保証はない」との発言が聞かれるとこの週高値となる1.1139を示現。ただ、その後はじり安の展開に。29日は流動性の薄い中、1.10台半ばを挟んでの取引が続き1.1038でNY市場クローズを迎えた。1月2日週のユーロ/ドルは水準を切り下げた。1.1046で年初1月2日のオセアニア市場オープン。アジア時間はドル/円主導でドル買いの中、緩やかな下落。欧州時間に入ると欧州株・欧州債が軟調、これを見ながら大台1.1000を下回る。北米時間も年末の株高・債券高が反転、為替市場ではドルが買われる展開に1.0938まで下押し。3日のアジア時間は一時戻りを試す場面もあったものの1.1000回復とはならず。その後欧州株式市場が続落、米金利上昇となるとユーロ/ドルは売られる展開。北米時間で発表された米12月ISM製造業景況指数を受けてドル買いとなると一時1.0900を下回る。4日はもみ合い後、域内および各国の12月サービス業PMI確報を受けてじり高。北米時間で発表された米12月ADP雇用統計にドル買いになるもユーロ/ドルの下値は堅く1.09台半ばでの取引となる。週末は事前予想を下回る独11月小売売上高に加え、米12月雇用統計が強かったことから1.09を割り込む場面もあったが、下押しは限定的となり、1.0940で先週金曜日のNY市場をクローズした。

今週のユーロ/ドルは横ばいの展開を予想。12月はECB会合で利下げに対するヒントが得られなかったことから、利下げ示唆を行ったFRBと比べ、相対的にユーロが買われる展開となり、月末には1.1100を上回る場面もあった。ただ、時間の経過とともにECBのスタンスとは裏腹に市場参加者は冷静で、4月会合までの利下げ予想が根強かったこともあり、1.1000を維持することなく上昇分を吐き出した格好となっている。今週の域内の経済指標については9日(日)に独11月鉱工業生産の発表が控えている他、主だったものは特になし。現状のマーケットでのテーマは世界的な利下げへの転換となっており、12月は米・欧ともに利下げ予想の進退に為替市場も振らされた。次回ECB会合は1月25日(木)、FOMCは2月1日(木)となっており、一進一退で方向感の出ない展開を予想。リスクシナリオを強いて挙げるのであれば、織り込みが進みすぎているようにも見受けられるFedの利下げ期待の巻き戻しに伴うユーロ安/ドル高か。

(3) 先週までの相場の推移

先々週と先週(12/25~1/5)の値動き: (対ドル) 安値 1.0877 高値 1.1139 終値 1.0940
(対円) 安値 155.10 高値 158.97 終値 158.31



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2900 180.00 ~ 186.00 円

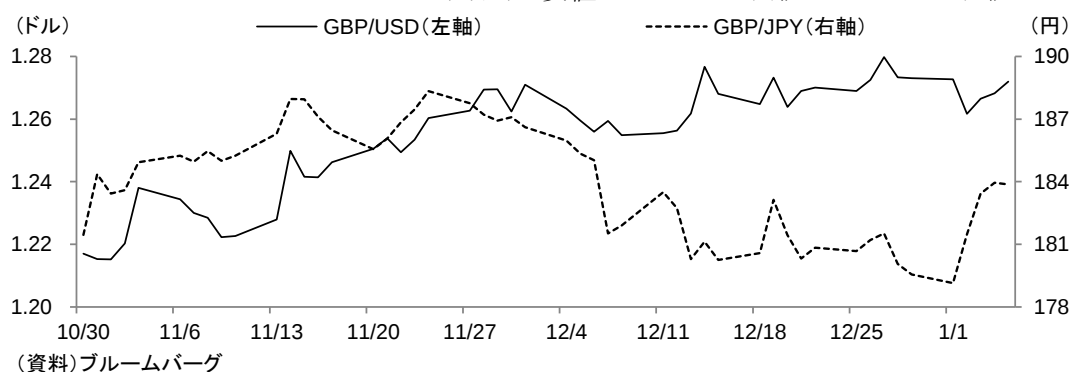
(2) ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

年末年始(12月27日～1月8日)の英ポンド相場は、上下にもみあったものの、ほぼ横ばいの展開となった。2023年最終週となる12月27日～28日は対ドル1.2725から1.2827まで上昇後、1.2733と週初の水準に落ち着いている。年明けは、FOMCのハト派化を受けた米金利低下・ドル安からの巻き戻しを受けて1月2日～3日には対ドル1.2612までいったん下落。特に、1月3日に公表されたFOMC議事要旨では、12月13日の会合後にパウエルFRB議長が記者会見で「今会合では利下げのタイミングを協議した」と述べた際に感じたほど、利下げに前向きな姿勢は示されなかった。1月4日は小動きな展開となった一方、5日は一転して上下に振れ幅の大きい展開に。ロンドン時間午前中にはユーロ圏12月HICP速報値が公表され、前年同月比+2.9%と前月の同+2.4%から加速したことを受けてユーロ買いドル売りに。ポンドもこの流れに乗る形で上昇。もっとも、ロンドン時間午後には公表された米12月雇用統計と、米12月ISMサービス業景況感指数は強弱まちまちな内容であり、ポンドの対ドル相場は上下に往って来いの展開となった。英国個別の要因の存在感は小さかったものの、1月4日に発表された12月DMPインフレ調査では1年後のインフレ予想が前月の年率+4.4%から同+4.0%に低下したことは注目される。DMP調査は英国の企業のCFOに対する調査であり、イングランド銀行(BOE)の当局者による注目度が高いとされる。賃金の伸び率の高さを考慮すれば、DMPの結果が即時にBOEのタカ派姿勢からの転換を促すものではないだろうが、金利の高止まりに伴う景気の減速リスクが意識される中、企業部門がBOEに利下げを求める声は今後、強まることが想定される。

今週1週間のポンド相場は1月11日(木)に米12月CPIという重要経済指標の発表を控え、引き続き米国ないしドル主導の展開となる公算が大きい。年末年始に発表された米経済指標は強弱まちまちだったが、引き続き堅調な雇用情勢を考慮すれば、インフレ高止まりが意識される可能性が高いだろう。ポンド相場は上値の重い展開となりそう。英国の経済指標では、1月12日(金)に発表される11月月次GDPが注目される。12月22日公表の英7～9月期GDPの確報値が前期比▲0.1%と速報値の時点では横ばい推移だったところから下方修正となった。10月に引き続き11月も弱い結果となれば、再び英景気の不況入り懸念が再び意識されることになるだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先々週と先週(12/25～1/5)の値動き: (対ドル) 安値 1.2612 高値 1.2825 終値 1.2719
(対円) 安値 176.91 高値 187.22 終値 183.93



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 部坂 洋太郎

(1) 今週の予想レンジ: 0.6550 ~ 0.6800 95.50 ~ 98.00 円

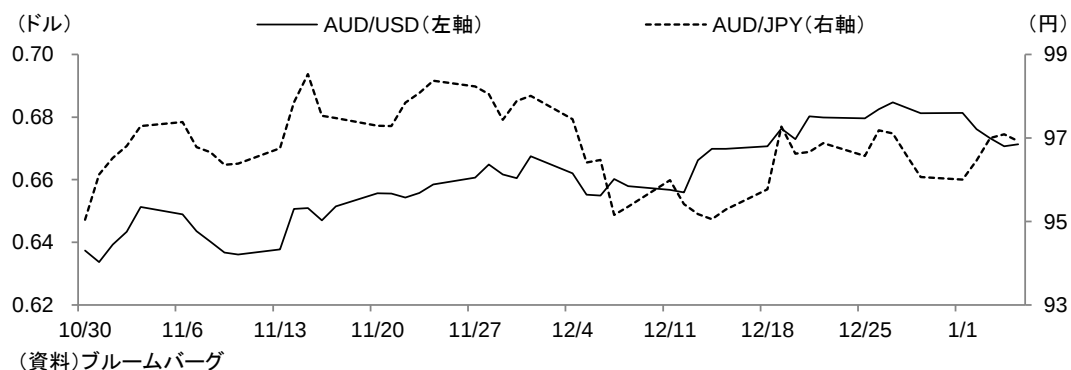
(2) ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

先々週から先週にかけて豪ドル相場は、0.67台後半から一時0.68台後半まで上昇したものの、その後は押し戻されて0.68台前半にてクローズ。年明け以降はドル高の流れにより豪ドルは軟調推移となった。25日・26日は祝日で流動性が薄いなか特段材料なく方向感のない値動きとなり、0.68台前半で引け。27日、米債利回り低下に伴うドル売りに豪ドルは0.68台半ばまで小幅に上昇して引け。28日、鉄鉱石の上昇を受けた豪ドル買いの流れから、一時は2週間高値である0.6871まで上昇。その後はドルが上昇する流れに押し戻され0.6830近辺でクローズ。29日は年末で参加者も少ない中、持ち高調整等の動きにより一時は0.6780台まで下落した後、買い戻され0.6810台で越週となった。年明け2日は0.6830台近辺でオープンすると、米金利上昇を背景にドル買いが強まり、豪ドルは0.6760近辺まで下落して引け。3日は欧州株が下落するリスクオフの流れから豪ドルも売り込まれ、0.6700割れをトライする流れとなった。発表されたFOMC議事要旨では、明確な利下げ時期には言及なく米国の早期利下げ期待が後退する形となったが豪ドルは安値圏である0.6730近辺で引け。4日はアジア時間に発表された中国12月PMIサービス業が事前予想を上回ったことで、0.6760まで上昇したが、米国時間に発表された米12月ADP雇用統計が事前予想を大幅に上回る結果となったことで豪ドルは再び0.6700近辺へ下落となり引け。5日、米12月雇用統計が事前予想を上回る結果となりドル買いの流れから一時0.6641まで下落。その後は買い戻されて0.6710近辺でクローズとなった。

今週の豪ドルは上値が重い展開を予想する。今週は11日(木)の米12月CPIに注目が集まるなか、直近の米国の経済指標を受けて早期利下げ期待が後退しており、ドルが再度買い戻されている状況下、引き続き豪ドルは売られやすい展開を想定。市場参加者は、米国が5月のFOMCまでに1回の利下げが予想されているが、FED高官からは経済指標次第とする姿勢であり米CPIの結果次第では利下げ期待の更なる後退の可能性も十分にありえる状況であり、豪ドルは再び0.6500近辺まで下落する流れとなるのではないかと。また、その他の経済指標としては9日(火)豪11月小売売上高、10日(水)豪11月月次CPIインディケーター、11日(木)豪11月貿易収支が発表予定となっている。

(3) 先週までの相場の推移

先々週と先週(12/25~1/5)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。